

[3] 課題学習における授業づくり

課題学習の時間には、生活一般でねらう「生活に必要な実践力」を支えて定着させていくために必要な「基礎的な知識」を学習する。「基礎的」というのは、小中学校で学習する教科学習を、生徒の実態に合わせて段階的に指導するという意味ではない。「生活していく上でこれだけは知っておかねばならないという情報や知識」を意味する。

これには、学級ごとに取り組みられる生活一般の学習内容と関連させることにより、単なる知識の注入にとどまらず、即生活に生かせる知識として体得させるというねらいがある。

我々は、まず一人ひとりの生徒が社会的自立をしていくために必要だと予想される事柄を精選し、単元や題材として取り上げて授業として仕組む工夫をする。生活一般と課題学習での学習が相乗効果を持って一人ひとりに確実な力がついていくことをねらっている。

このようなねらいを持つ課題学習での授業を充実させるため、我々は次のような観点で授業づくりを試みた。

○ 個々の課題そのものに直接的でも間接的でもアプローチできるような授業

高等部の生徒が現在抱えている課題は、次のように大きく分類できる。

- ・ 社会の中の一員であるという意識や社会への興味・関心・知識が希薄であること
- ・ 自分で考えて行動に移そうとする意欲・思考力・実践力が乏しいこと
- ・ 基礎学力の維持、向上が難しいこと
- ・ 身体機能、言語機能の向上や物事を認知する力が弱いこと
- ・ 基本的な生活習慣の確立が十分でないこと
- ・ 情緒が不安定であること
- ・ 自分の障害を受け止めて認め、克服・改善しようとする意識が希薄であること

これらの課題を克服していくために、学級集団を重視しつつ個に応じた配慮や教材が提供できるように、最優先とされる課題や時期に応じて小集団を編成する。生活一般を中心とする学級集団の学習で自らが課題となるものを認識した上で、課題学習に臨めるようになることをめざす。

(教師の姿勢)

個々の発達やつまづきを的確に把握した上で、社会参加に向けて最優先となる課題に着目して指導内容を焦点化する。何のために、この学習に取り組んでいるのかを生徒一人ひとりに明確に意識させることができるように、学習の目的や個々の課題を提示することを授業展開の中に必ず盛り込みたい。また、生活一般の実践を中心とした学習の中から、一人ひとりの課題を含むような内容を引き出して教材化する。学級での一斉学習と関連させることで、生徒への動機づけは比較的容易となり、目的意識を持って取り組めると考えられる。

この時我々は、生活一般と課題学習の年間指導計画をよく照らし合わせて吟味し、継続的な指導が可能となるように配慮しなければならない。

次ページより各学年ごとの生活年齢と発達を考慮したグループ編成での取り組みを紹介する。

<1年生の取り組み>

(1) 生徒の実態

本学級の生徒は、男子7名、女子4名、計11名である。本校中学部より入学した生徒は1名のみで、10名は中学校の心身障害児学級や病弱養護学校からの入学である。障害は、自閉的傾向・てんかん・脳水腫・孔脳症・結節性硬化症・学習障害と多種多様であるが、発達年齢はS-M社会能力検査で8歳から12歳と比較的高く、ことばによる指示の理解ができ机上学習が可能な集団である。しかし全体的に、生活経験の不足と高校生であるという自覚に欠けるため、潜在的に身辺処理能力を持っていても、日常生活の中では、自分で問題解決をしようという意欲があまりなく、具体的な方法も身につけていないという傾向がある。他とのやりとりでは、積極的に発言する生徒は限られ、指名されての発言が多く受け身に終始しがちである。その際、自信がなくうつむきかげんに小声で話し、相手にじれったさを感じさせてしまうことが多い。また、物事の捉え方が自己中心的で、自分の立場をわきまえたり、人を思いやり気づかうような心の豊かさがまだ育っていない。

教科的側面では、加減乗除の計算ができて生活の中では使えない生徒、10までの数が正確に数えられない生徒、出来事や思いを文章化することが苦手な生徒、簡単な単語をききとってひらがなで正しく表記ができない生徒、教科的な知識は小学校6年生程度あるが抽象的な思考が苦手な生徒等、教科的な力やその落ち込みはさまざまである。

(2) グループ編成の観点と指導方針

上記のような生徒の特性やおちこみに着目して、2単位時間の課題学習の時間を「教科・領域にとらわれず、現在最も優先される個別の課題克服に取り組む」時間と、「生活一般での学習の補強・定着を図り、コミュニケーションに関する基礎となる力の向上をねらう」時間にわけ、一人ひとりのできないことを少しずつできるようにしたり、特性を生かしたりすることをねらった。グループ編成は下記の通りである。

① 「教科・領域にとらわれず、現在最も優先される個別の課題克服に取り組む」学習

班	グループ編成の観点・ねらい	指導方針
個別	<ul style="list-style-type: none"> 生活に困らない程度の基礎学力があり、指示によって自主学习が可能である。 将来を見越して何らかの資格や技術の取得をめざしたり、家庭環境を考慮し、身辺処理能力の向上をねらう。 	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりに個別メニューを準備し、自主性を尊重した指導に心がける。
動き	<ul style="list-style-type: none"> スムーズな身のこなしや動きの獲得。手指の巧緻性を養い、道具の操作能力を高める。 左右・前後等の空間の認知力を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活の中の「家事」の分野の動きの中で、ねらう力の向上をめざす。
ことば	<ul style="list-style-type: none"> 「読む・聞く・書く・話す」力を養う。 特に、ひらがなの正しい表記や、生活に最低限必要なことばの読み書きが少しでもできるようになることをねらう。 	<ul style="list-style-type: none"> 声を出して話す場を多くする。 毎日宿題を課する。

② 「生活一般での学習の補強・定着を図り、コミュニケーションに関する基礎となる力の向上をねらう」学習

班	グループ編成の観点・ねらい	指導方針
A	<ul style="list-style-type: none"> ・人にわかるような表現で話したり書いたりできる力の向上。 ・相手の話す内容を正しく理解したり、資料を正しく読み取ったりして、話しことばや書きことばでまとめる力を養う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習ノートを利用して、まとめるものになる物を個人もちにする。 ・好ましい接し方の模範やカセットテープを利用してわかりやすくする。 ・自分の話し方をビデオ等によって提示し、自分の課題に気づかせる。
B	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き取ったことを、文字で正しく書く力を身につける。 ・人と関わる経験を増やし、相手の話しを聞こうとする意欲や態度を養う。 	
C	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の方から人に関わり、話しをするという経験を増やす。 ・いろいろな場面での話し方・挨拶・対応の仕方を具体的に身につける。 	

※なお、グループの所属は原則として固定しているが、実態に応じて流動的になることも許容する。

(3) 単元の設定

①のグループ編成での学習では、一人ひとりの生活に密着したものを単元や題材として取り上げて教材化した。たとえば、洗濯・野菜の皮むき・衣服たたみ・自己紹介・運転免許取得のための学習などである。学習内容がある程度パターン化しているので、生徒自身に見通しを持たせやすく、自主的な取り組みが期待できる。

②のグループ編成での学習では、生活一般での単元と関連したものを題材として取り上げている。たとえば、生活一般が「学校紹介ビデオづくり」という単元の場合、②の時間には、ビデオづくりに必要な取材をしたり、取材テープのテープおこしをしたり、取材ノート・本・資料をもとにまとめて原稿を作る等の学習が展開され、それぞれの学習がまた生活一般の時間に還元されていくのである。

(4) 実践例 —Cグループの実践(E男を中心として)—

生活一般で提案した「学校紹介ビデオづくり」の計画は、指導者が提示したが、生徒個々は大いに興味を示した。調査、取材は、各グループに分かれ、調査項目を分担することにした。

以下、Cグループの実践を記してみたい。

【第1回目の取材(Y先生からの取材)】

質問1 昔E組には高等部がありましたか。

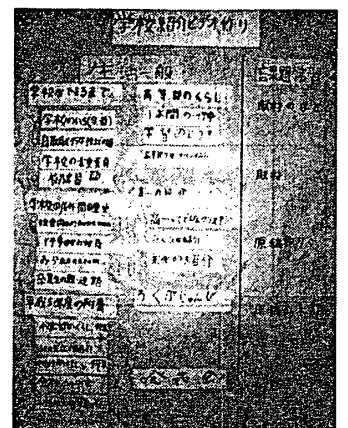
質問2 もしなかったら、調べる方法を教えてください。

上記の質問をノートに書き、模擬練習をしてから出向いた。

【結果】

入室、退室の「失礼します」「ありがとうございました」は話すことはできるが、声が小さく、緊張していた。

取材中、「高等部はありませんでした」の答をメモにすると退室して



学校紹介ビデオづくりの計画表

しまった。第2問目は、質問できなかった。

【第2回目の取材（Y先生からの取材）】

前回の取材ビデオを、Cグループ全員でみて、お互いの良い所、失敗した所を指摘しあった。Cグループ3名ともに、自分の取材（コミュニケーションの実態）を目のあたりしたのは初めてであり、新鮮なおどろきとして受けとめていた。

E男の反応—自分が第2問目を質問することを忘れてしまったことに気付く。今回は、メモをとることの大切さに気付き、

ノートに丁寧に枠を書き入れ質問事項を記入した。前回同様、練習してから取材に出向く。

質問1 生徒は、どこからかよっていますか。

質問2 卒業生の数としんろを教えてください。

【結果】

入室、退室は第1回目と同様。メモを一語一語読んで質問し、答をノートに記入した。「通学生の数は合計何人になりますか」と逆に質問され、とまどってしまい答えることができなかった。合計については、事後に指導した。

【第3回目の取材（Y先生からの取材）】

前回の取材ビデオをみて、合計が答えられなかった所を覚えていた。今度は、おちついて質問すると答えた。

質問1 E組の卒業生は、どんな所へしゅうしょくしましたか。

質問2 どんな勉強をしていたかおしえてください。

【結果】

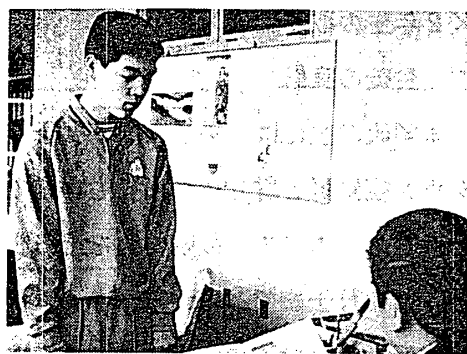
特別な進歩は認められなかったが、真剣に聞く態度は見られた。メモは、ひらがなと簡単な漢字を交えて記入していた。字はたどたどしいが、まちがいはなかった。

(5) 考察及び今後の課題

課題学習では、今持っている生徒の良い所と、おちこんでいる側面を見極め、各生徒の課題に迫らなければならない。対話の基礎となる声の大きさは、その時々声かけをして、相手に伝えるための最低の条件となることを意識させなければならないと考える。対応の態度は、鏡やビデオを見せ、友人との比較を通して指導することが効果的であった。メモ取りの態度や正しい言い方については、口元をひきしめたり、口を閉じるように声かけをすることが効果的であった。

いずれの場合でも、時には、生徒を追い込み、学習事項の重要さを自覚させることも必要である。また、家庭との緻密な連携を行い、定着をするための継続指導を図る必要がある。現在の最優先課題がその生徒のどこにあるのか、また、どのような教材や指導法でせまるのか、各学習場面での実践と反省の繰り返しがこの課題学習をするうえで重要であることに気付いた。今後も、これらのことをふまえて指導にあたりたいと考える。

(川本)



副校長先生に取材をしている様子

〈2年生の取り組み〉

(1) 生徒の実態

本学級の生徒は、男子4名、女子4名、計8名である。自閉的傾向、言語障害、脳性麻痺後遺症、ダウン症候群と併せ持つ障害も多様であり、S-M社会生活能力検査で3歳から11歳と幅がある。

従って、書字力の段階でもなぞり書きの段階のF子、平仮名の視写の段階のJ男から小学校高学年の段階のH子までと広がりがある。作文力に至っては、全く書けない生徒が2名あり、他の6名も小学校低学年の段階に留まっている。また、自分の思いや考えを積極的に発言するのはH子一人で、他の生徒は個別の質問に答える形で、自分の思いを表現することが多い。計算力は全体に低く、小学校低学年の段階から数の概念を育てる段階にある。それらの力も机上学習によるものが多く、生活の中での実態は、更に低くなる傾向がある。

(2) 生徒の個別のねらい

H男	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いを表現する場面を設定し、ことばや考えをやりとりの中から選択する。 音読したり視写することから始め、文字への抵抗を少なくする。
I男	<ul style="list-style-type: none"> 書字力や計算力を生活の中で生かせるよう、生活経験の拡大を図る。 具体的な作業を通して、生活に必要な技能を少しでも身につける。
J男	<ul style="list-style-type: none"> 友だちとの話し合いや社会の人とのやりとりの中で、自分のことばを少しでも分かりやすく話す。 個別メニューに従って構音練習をする。
K男	<ul style="list-style-type: none"> 社会生活を営む上での基礎的な知識を学習する。 具体的な作業を通して、正確に指示を聞き取ったり、簡単な計算をする。
E子	<ul style="list-style-type: none"> 具体的な作業を通して情緒の安定を図る。 相手の指示を聞き取り、自分の思いや困ったことを相手を意識して訴える。
F子	<ul style="list-style-type: none"> 具体的な作業を通して、生活に必要な技能を少しでも獲得できるようにする。 1対1のやりとりの中で、相手を意識してことばをはっきりと分かるように話す。
G子	<ul style="list-style-type: none"> 具体的な作業を通して情緒の安定を図る。 生活全体や学習への見通しを持たせることによって、自傷行為を抑える。
H子	<ul style="list-style-type: none"> 社会との関わりを広げ、その中で自分の思いをはっきりと発言する。 読む、書く、話すといった力を発揮できる場面を多く設定し、基礎的な教科学習への意欲を高める。

(3) 指導の方針と手だて

- ① 生活一般の学習との関連を図りながら、個別の課題に即した題材を設定する。
- ② 個別の課題に即して学習形態を、題材毎に組み替える。従って、グループ学習における小集団は固定せず、題材毎にグループ編成についても検討する。
- ③ 題材に応じて、指導者を変える。
- ④ 単元を組む内容から、個別に繰り返し継続して取り組む内容まで、できるだけ生徒の実態に応じて学習計画を立てる。

(4) 題材の組み立ての事例

生活一般 ————— 人の一生

課題学習 A・男女の身体の中の変化
(H男 I男 K男 H子)

C・生理の手当て
(F子)

・男女の身体の成長
(H男 K男 H子)

・将来の家庭生活
(H男 K男 H子)

B・男女のエチケット
(I男 J男 E子 G子)

・身体の清潔
(F子)

D・洗濯
(I男 F子)

生活一般 ————— 思 春 期

課題学習 ————— B・生理の周期と準備
(E子 G子 F子)

生活一般 ————— 男性の身体・女性の身体

課題学習 ————— A・妊娠と出産
(H男 I男 J男 K男 H子)

B・清潔な身体
(E子 F子 G子)


生活一般 ————— 好ましい男女交際

課題学習 ————— A・性反応と性行動
(H男 I男 J男 K男)

B・性被害
(E子 F子 G子 H子)

(5) 実践例「牛乳パックの回収」

(学習の展開例)

	活 動 内 容	個 別 の 課 題
A グ ル ー プ	1. 牛乳パック回収の計画を確認する。	H男・依頼を受けて、一人で用件を正しく相手に伝える。 (住宅地図を借り、学習者の人数分コピーする。)
	2. 牛乳パック回収後の始末の方法を話し合う。	・住宅地図を読み取る。 ・学習のまとめを代表して記録に取る。
	3. 牛乳パック回収のチラシを配布する計画を立てる。	I男・住宅地図を見て、回収地域が分かる。 ・回収地域の戸数が正確に計算できる。
	4. 回収地域の略図を書き、分担を決める。	J男・住宅地図の回収地域部分を指摘されて、回収地域の戸数を計算する。
	5. 学習のまとめの記録を取る。	・回収方法について自分の考えを友だちに分かるよう話す。
	 <p>住宅地図で回収地域を確認する</p>	<p>K男・指示を正確に聞き取り、相手に伝える。 (住宅地図を～冊借りる。チラシの印刷数を依頼する。チラシの誤りを伝える。)</p> <p>H子・回収業者の電話番号を調べ、電話で回収方法等について打ち合わせをする。回収地域の略図を書く。</p>
		<p>活動内容の4、5はH男、H子が取り組み、J男は構音の個別メニュー、I男、K男はアイロンがけをする。</p>

B グ ル ー プ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 牛乳パック回収の計画を確認する。 2. 本時の学習内容を知る。 3. ワープロの準備をする。 4. ワープロで指定された文書を作成する。 5. 牛乳パック回収のチラシを印刷する。 	<p>E子・学習内容に見通しを持つ。(本時の学習、牛乳パック回収の取り組み)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワープロを操作することへの興味関心を高め、情緒の安定を図る。 ・操作が分からない時の適切な質問の仕方を確認する。 <p>G子・回収計画をワープロを使って清書し、今後の学習の方向を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワープロの操作を楽しむ。分からない時には質問する。
C グ ル ー プ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 回収した牛乳パックの始末の方法を知る。 2. 具体的な作業を通して、少しは手順を覚える。 	<p>F子・牛乳パック回収の手順を知ることにより、回収作業に見通しを持つ。そして、実際に回収する時に少しでも自分から声を出せるような意欲づけをする。</p> <p>[F子は個別に病識指導を行う。]</p>



ワープロを操作するG子

「牛乳パックの回収」という題材は、生活一般との関わりが強い題材である。ただ単に回収して歩くというのではなく課題学習で個別の課題に即した学習を事前事後に組み込んでいくことで、生活一般の学習がより個別の力を発揮させる場面になると考えた。

この題材は社会との関わりが強く意識されているために、教科的な要素も含めて、生活に必要な学習を組み入れ易い。しかし、一方で生活一般との関わり

が強いだけに、課題学習のねらいが生活一般におけるねらいと重複する傾向が強い。

(6) 考察と今後の課題

生活一般との関連が強いということは、より生活に密着した題材で、個別の課題に即した指導を行うことが必要である。従って、生徒個々の現在の障害の状態も含めて、心身の成長をどう捉え、課題をどう設定していくのが指導者側の大きな課題となっている。本年度は、生徒の理解力、障害種別や置かれている環境、コミュニケーションの実態を考慮して、個別の課題を設定し題材を組んでいった。抱えている課題により近づいた内容を取り上げながら小集団の編成を組み直すことで、個別の課題に即した指導を考えてきたが、中途半端になり、生徒にとっても指導者にとっても未消化な印象は否めない。今後は個人の学習記録を積み上げながら、指導者間の話し合いを更に密にし、教材への取り組みも検討する必要がある。

(白水)

〈3年生の取り組み〉

(1) 生徒の実態

3年生は男生徒4名、女生徒4名の計8名である。障害は自閉症、場面緘黙、てんかん、ダウン症など障害が多様なだけでなく、重複障害の生徒も何人かいる。全般的に自己中心的で、相手の気持ちを理解することが難しい生徒が多い。さらに人間関係を調整する力が不十分で、未発達な生徒が大半である。言語能力については機能的に障害がある生徒は1名であるが、喃語の段階の生徒や発語が不明瞭であったり、障害のために集団との関わりが苦手な生徒がいる一方、ある程度言葉を自由に使いこなす生徒もいる。そして、半数の生徒は、漢字をつかったの文を書くことができる。

高校3年生だという意識は、一人ひとりの発達段階に応じて持っているものの、実際の生活においては、一人だけでやり遂げられる事柄は少ない。依頼心が強くすぐに他人任せにする生徒や、身辺処理が十分にできないため介助や援助が必要な生徒もいる。

身体的な障害を有する生徒はいないが、目と手の協応動作が困難であったり、身体の各部分の機能が未分化な生徒が少数いる。全体的には、迅速な行動が苦手であり、柔軟性や、耐久力に欠ける傾向がみられる。

(2) グループ編成の観点と指導方針

班数	編成の観点	指導方針
A 4	<ul style="list-style-type: none"> 卒業後は、事業所や福祉施設に就労し、いろいろな公共機関や、一般の社会人と関わりを持つ可能性が強い。 漢字混じり文が書け、簡単な場に応じた会話ができる。 二桁までの加減計算が可能である。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活一般の学習を拡充、強化する。 一人でも生活ができるようにする。 交通機関や、関係がある各種の公共機関などについての学習を強化する。
B 2	<ul style="list-style-type: none"> 福祉施設に入所か通所する予定であるが、施設や家族の補助が必要である。 靴のひもが結べなかったり、衣服や品物の整理整頓ができない。 仮名の読みや、物と数との対応が困難である。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活一般の内容を補充したり、基礎的内容を補う。 日常生活に密着した具体的な技術や方法を重視する。 言葉や数に関わることを生活と結びつけて、継続的に学習する。
C 2	<ul style="list-style-type: none"> 身辺自立が確立していないため、将来も何らかの介助が必要である。 他者との心の交流がしだいに広がりつつある時期である。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活一般と直接に関わる内容を教材としない。 生活の基本に関わる学習（物の移動、指示への対応など）と、身体機能の発達を促す活動を継続的に行う。 パターン化した活動で見通しを持たせる。

(3) 実践 一整理整頓をしよう (Bグループ)一

本グループは、言語で表現するのが苦手であり、身体を動かす活動を好む生徒2名で編成されており、卒業後は福祉施設に入所または通所する予定である。卒業後の生活を考えるうえで、今一番彼らに必要なことがいくつか考えられるが、その中でも繰り返し学習すれば定着すると思われる整理整頓に焦点を当て、指導を試みた。即ち、知識を教えるのではなく、実際に出来るようになることを狙いとした。整理整頓が出来、回りの人達に良い印象を与えることは、集団の中でよりよい人間関係を持つことにつながり、コミュニケーションが苦手な彼らにとっても非常に大切なことであると考えた。

① 生徒の実態

自分のことは自分でしようという意識は持っているものの、いざ、整理整頓をしようとするときやり方が分からないため、取り掛ろうとしない実態がある。机の中はゴミの山で、紙はしわくちゃ、筆入がありながら鉛筆や消しゴムは、ばらばらに机の中に散らかっているといった状態であった。給食の残りが入ったままのこともあり、不衛生であった。

更衣室のロッカーも机の中と同じく乱雑であった。2人とも上着はどうかハンガーに掛かっているが、ズボン、スカートの掛け方が悪く、下に落ちていることが多かった。原因は、掛け方の要領が悪い上に、動作が遅く時間がかかるため、急いでするためだと考えられる。

② ね ら い

- a 身の回りの物をいつも整理整頓をしておく必要感を持たせる。
- b 身近な物品を整理整頓する方法を身に付けさせ、繰り返し練習させて定着を図る。

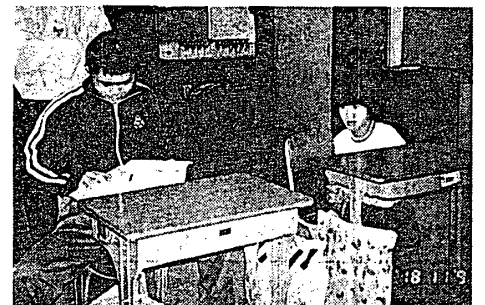
③ 事 例

a 机の中の整理

- ・机の中にあった物→丸めた紙、パンの残り、芯の折れた鉛筆、ひびのはいた下敷き、消しゴム、ノート、プリント、中身がない筆入れ、埃

・指導内容

必要な物と捨てる物に分ける
机の中を拭く
筆入に削った鉛筆と消しゴムを向きを考えて入れる
ノートと紙を揃えて置く
小物をまとめて入れる入れ物を工夫する



机の中の整理

パンの残りを捨てることに抵抗を示したため、古くなった食べ物を食べると、おなかが痛くなると説明し、捨てることに同意させ、これからも給食の残りを机には入れない約束をさせた。

入れた物を一つずつ出すことを二人で競争させ、しまい方を上手にしないと早く目的の物が出せないことに気付かせ、使い勝手の良い入れ方が大切であることに気付かせた。しかし、手先が無器用であり、狭い机の中を常に綺麗に整理整頓することはなかなか難しいが、食べ残しの食べ物を入れるこ

とはしなくなった。注意を促されたり、授業があるときには机の中は整理整頓されているが、要る物と要らない物の区別、使うのに都合のよい置き方などをもっと個々に継続的に観察指導の必要があると思われる。今後も日常的に指導を続けたい。

b 更衣ロッカーの整理整頓

・制服をハンガーに掛ける練習

	始めの実態	指導の手だて	変容
〇 男	<ul style="list-style-type: none"> ・上着はハンガーに掛かっているが、肩はずれて斜めになっている。 ・ズボンは折り目に合わせて畳んでいない為に、しわになっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上着の両肩にきちんとハンガーが入っているか確かめてからロッカーに入れさせる。 ・折り目に当たるベルト入れを持ってズボンの裾を揃え、ハンガーに差し込む練習をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハンガーにまっすぐ上着が掛かっている為、下に落ちることがなくなった。 ・時々いい加減にしているが、声かけをするとすぐに丁寧にやり直しをする。
J 子	<ul style="list-style-type: none"> ・ハンガーがなく、フックにぶら下げていた。 ・スカートが重く、片手で支えながら裾を揃えるのが難しく、一人で綺麗に掛けられない。 ・時間を人一倍掛けてもうまく出来ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スカートつりがついたハンガーを持ってこさせた。 ・スカートのベルトを止め、ベルトの部分を持って揺すって裾を揃え、そのまま下に置き、スカートつりに挟む方法を練習させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上着とスカートと一緒にハンガーに掛けている。 ・学習場面ではゆっくり時間があるので丁寧にしているが、毎日の着替えの時には時間に間に合わず、フックに掛けている時がある。

制服をハンガーに掛ける方法は、何回か練習する間にマスターできたが、2人だけでゆっくり時間がある授業の時にできたとしても、友達が大量いる中で限られた時間内に、出来るようにならなくては、真に出来たとは言えない。毎日の更衣の時間を観察し、指導を重ねていきたい。

(4) 考察と今後の課題

卒業を目前に控えた今現在、3年生は多くの課題を抱えている。限られた日数で生活の課題解決方法を習得させる為、進路別によるグループ編成で、実習を中心とした実践を試みた。

生徒一人ひとりの課題だと考えた内容が果たして正しかったか、指導方法はどうかであったか、大いに反省すべき点が残る。が、しかし、今まで一人でできなかったことが少しずつ出来るようになり、大人らしく変容していることも事実である。全般的に人と言葉を通して関わるのが苦手な3年生であるが、小グループでの学習時には、前を向いて大きな声を出して生き生きと学習に取り組むことが出来た。人間関係の基盤となるコミュニケーションの直接的な指導に当たった時間は、多くはなかったが、学習で身に着けた生活力は、コミュニケーションの力を高める力となった。学校現場で学んだことが、卒業後の生活に生かし使えるような授業を組み立てることが今後の課題と言えよう。(鹿本)